



Title	条件不利環境の観光資源化とその活用促進メカニズム：「雪氷観光」の創造事例を対象として [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	福山, 貴史
Citation	北海道大学. 博士(観光学) 乙第7190号
Issue Date	2023-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91361
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takafumi_Fukuyama_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：福山 貴史

学位論文題名

条件不利環境の観光資源化とその活用促進メカニズム

—「雪氷観光」の創造事例を対象として—

本論文は、地域が主体となって地域の条件不利環境を観光資源化していく過程に着目し、その活用促進メカニズムの解明と一般化を検討したものである。そのために、北方圏地域における社会経済や日常生活に実害をもたらす冬季の雪氷に焦点をあて、それを観光資源化する「雪氷観光」の創造事例を主に取り上げている。

各地域で人口減少や高齢化を背景として地方創生の重要性が益々高まる状況下、いわゆる地域づくりを困難とする条件不利地域が存在する。そして、この中に「豪雪地帯」も含まれ、そうした地域は、雪氷災害などによって産業が停滞し生活水準の向上も阻害されている。しかし現代では、例えば「地吹雪ツアー」に代表されるように、条件不利な気象現象を観光活用している事例が見られる。こうした取組みは集客効果を通じて地域づくりに貢献しているが、これは一般に「逆転の発想」や地域の努力といった評価に留まっており、汎用性の期待できる方策とはみなされていない。

これに対し本論文は、地域に与えられた条件不利環境を、受容すべき「環境」ではなく働きかけるべき「資源」として対象化し、地域がそれを観光資源化していく一連のプロセスに焦点をあて、その活用促進メカニズムを明らかにすることを目的とした。そのために、「雪氷観光」の定義づけとその特性分析に基づく類型化、本メカニズムの機能分析による観光資源化プロセスの特徴の明確化、本メカニズムの応用可能性と課題の明確化という三点を具体的な目的として設定している。

研究方法としては、資源開発の視点に立脚し、主な分析フレームワークには資源論を採用している。その資源化プロセスに見られる「文化的な欲望」と「科学技術を含む能力」の貢献の考え方を取り入れ、これに基礎的なマーケティングの考え方を加えて活用促進メカニズムを分析している。さらに、本メカニズムの根底にある「雪氷観光」の創造欲求の力学については、欲求段階説を用いて、文化、科学、個人、社会の四側面から検討している。

本論の構成として、序章に続く1、2章では、雪氷と人間の関わりの変遷の歴史を、雪氷研究で一般に用いられる、耐雪、克雪、利雪、親雪の変遷過程に即し示している。とくに1章では、主に耐雪と克雪の視点から、人類が寒冷地へ移動し雪氷と出会った史実と寒冷への文化的な適応、そして時を経て現代における雪氷災害やその対策に資する科学的な雪氷研究の系譜を整理し、寒冷を含めたこれまでの雪氷の条件不利性を明確にした。

2章では、主に利雪と親雪の視点から、人間が雪氷を文化的に観光活用する現代の諸相を整理した。「雪氷観光」の定義づけでは、雪氷学との接合を図る観光学の系譜を整理し、道内179市町村の冬季観光調査等の分析をまとめた。その結果「雪氷観光」を、「余暇時間における生活の変化を求める人間の文化的な欲求を充足する行為のうち、日常生活圏を離れ、物質・現象としての雪氷を、直接・間接消費する多様な一連の行動」と

定義づけている。また、自然科学と人文社会科学の接合領域で本メカニズムを分析・考察するため、科学技術社会論やインターナル・マーケティング（IM）などの諸理論と資源論との相関を示すことでその土台を構築している。

3、4章では、紋別市の流氷観光とキルナ市（フィンランド）のアイスホテルの事例を調査・分析している。これらの観光活用前の雪氷は、冬季の極寒に地域を閉ざし、その価値は評価されていなかった。とくに流氷は、地域の漁業関係者に実害を与える嫌悪の対象ですらあった。しかし、両事例において結果的には雪氷に新たな価値が創造され、観光資源化に成功した。この一連のプロセスには、地域関係者による活用促進の取組みが多様に見られ、資源論に基づく分析により、これらが主に文化的アプローチと科学的アプローチに分類可能であることを明らかにしている。

5章では、はじめに前記2事例における雪氷の価値形成過程を分析した結果、両事例とも4つのフェーズに区分されることを示した。さらに価値創造のアプローチの機能の視点から、成功地域の取組みには、それぞれ「文化的ブランディング」「文化的マーケティング」、「科学的ブランディング」「科学的マーケティング」の4類型で説明できることが分かり、これを条件不利環境としての雪氷の活用促進メカニズムとして提示している。

この分析過程で、本メカニズムの発動による観光資源化は、文化と科学の両効力の共在性と相互作用効果が特徴として見られ、とくにキルナ市の氷よりも強い不利性を帯びていた紋別市の流氷に対する取組みに科学的なアプローチがより多く見られたことから、社会的な価値の正当化に貢献する科学的アプローチの可能性を指摘している。

さらにこの検証のため、人間の動機づけに着目し、「雪氷観光」の創造欲求の動的な力学について分析している。先ず資源論による「文化的な欲望」は欲求段階説による高次の「自己実現欲求」と、次に「科学技術を含む能力」は重要で低次の「安全の欲求」とにそれぞれ関連していることを確認し、その上で、自己実現欲求は利他性の拡大をもたらす社会的な目標に接近・呼応することから、条件不利な雪氷の克服と活用実現に対する個々の欲求が、広く地域社会の「雪氷観光」の創造につながることを示している。

さらに社会科学技術論の援用によって、科学研究の成果も社会実装に貢献すること、とくに「雪氷観光」領域においては、文化的な自己実現欲求に呼応する社会的目標を、安全欲求を充足する科学的な効力が支えもつという相互作用効果があることを提示した。これにより、個人と社会の両面において、文化と科学の両効力が相互補完的に影響し合う共在性の意義、および条件不利性の強弱に基づく科学的アプローチの需要度の違いがあることを検証している。

6章では、地域内で活用促進する主体によってIMに力点が置かれることの重要性を、雪氷とは異なる池田町の山ブドウの活用事例を加えて重層的に分析している。その結果、キルナ市よりも市民活動や行政が主体となる紋別市や池田町のほうがIMを重視しており、本論による条件不利環境の活用促進に関しては、確立期までのIMによる資源化と、成長期以降のエクスターナル・マーケティング（EM）による観光資源化という二段階を経ることを明らかにした。

他方で「雪氷観光」の特性分析から、本論は雪氷とその観光消費行動の両新奇性に着目し、この評価軸から、今後の「雪氷観光」の継続した創造を喚起する意図をもって、新たな四類型を描いた。それは、「①ブレイクスルー型」「②クリエイティブ型」「③プロモート型」「④オーソドックス型」であり、両新奇性の高い①が最も革新的な指針になることを示した。

最後に、これまで価値が形成されてきた雪氷の地球環境変化による消滅リスクを新たな条件不利環境と捉え直して考察した結果、本メカニズム発動による効果的な応用可能性を提示できた。さらに他の条件不利環境に対しては、特定した活用対象の有形か無形かの属性による応用可能性と限界性を示し、一般化に向けた今後の課題としている。